

南島島

一本島、位置精測、結果尤、如ク從來報告トシテ差違アリ

西端笠置崎

北緯卅四度十七分三十秒
東經百五十四度四十分三十秒

但緯度太陽子午線緯度法ニ依リ測定ス

一本島別圖(A)ニ示スカ如ク三角形成レ沿岸線

ノ長約三哩三鏈極メテ卑低平坦ニシテ石井浦、北

東方最高処スラ僅ニ六呎吹テ出デズ全島灌木繁

茂シ海濱、白色ノ礫砂ヲ以テ繞圍ス

一本島、沿岸、四周岸ヲ干潮ニ洗滌スルニ鏈ヨリ

一鏈、至ル廣闊ナル礁派廣延シ特ニ笠置崎(西

坂本崎(東)及黒井崎(北)ノ三角ヨリ斗出スルモノハ
 五鍵ノ達スル之海岸リ距ル三鍵ノ至ル直ニ深サ百尋
 トナリ海底岩存サルヲ以テ船舶ノ近接便向スルニ適スル所
 ナシ唯風内ニ流レ風下ノ沖合ノ漂向スル外ナシ而シテ多
 少ノ潮流アルヲ以テ夜間ニ特ニ注意心ヲ要ス
 一上陸地奥ノ南海岸石井浦ノ海濱總派ノ取扱部
 僅ニ小艇船ヲ操縦スルニ足ル餘地アルノミテ風波靜
 穏ナル日ニ幸フニテ上陸シ企テ能クベキモ少シシテモ風波
 アリハ難事ニ属シ他ノ三海岸ニ至リテハ反令極メテ靜
 穏アルヨリ至モ總派ノ爲ノ到底近接スル能ハズ上陸
 ニ適當ナル餘地ヲ見出サズ本艦ハ各別南海岸

月 日	海水 温度	天 候		風 候				晴雨計		寒暖計		海 流	記 事
				午 前		午 後		最高	最低	最高	最低		
		午前	午後	方 向	力	方 向	力						
7-27	81-86	B.C.	B.C.	SE	1	SE	1	29.94	29.89	85	82	北東海流-遅平	午後六時十分降雨須臾-止ム
7-28	82-85	"	"	calm SE	0-1	SE-SE	1	29.93	29.89	85	81		午後十一時四十分降雨直-止ム
7-29	82-84	"	"	S-SE	1	S	1-2	29.94	29.89	85	82		午前〇時五分降雨直-止ム

東洋分館印

合井浦ノ沖合五鍵乃至一厘ノ澤泊レ傳マ船ヲ
以テ兵員及品物ヲ陸揚シ夜間ハ約五里ヲ離シテ
澤泊ス

查問澤泊位置ヨリ南海岸ヲ見ル別圖(B)
ホスガ如シ

一本島ノ氣候潮流等移民ノ語ル所信憑ハリ置フニ
足ルモノナシ惟木能澤泊中ノ天候ヲ摘要スルハ如シ

一本島附近に於て自荒測定リナセシ著シク変化シ
生スルヲ認メタリ

一本島シ距ル北西ノ西十海里ヨリ北西岸シ見ル邊
是外圍(C)ノ如シ

一本島邊之距離晴天ニ在テ花ノ如シ

一上橋樑(八六呎)十九哩

一上艦橋(四六呎)十六哩

一下艦橋(三八呎)十三哩

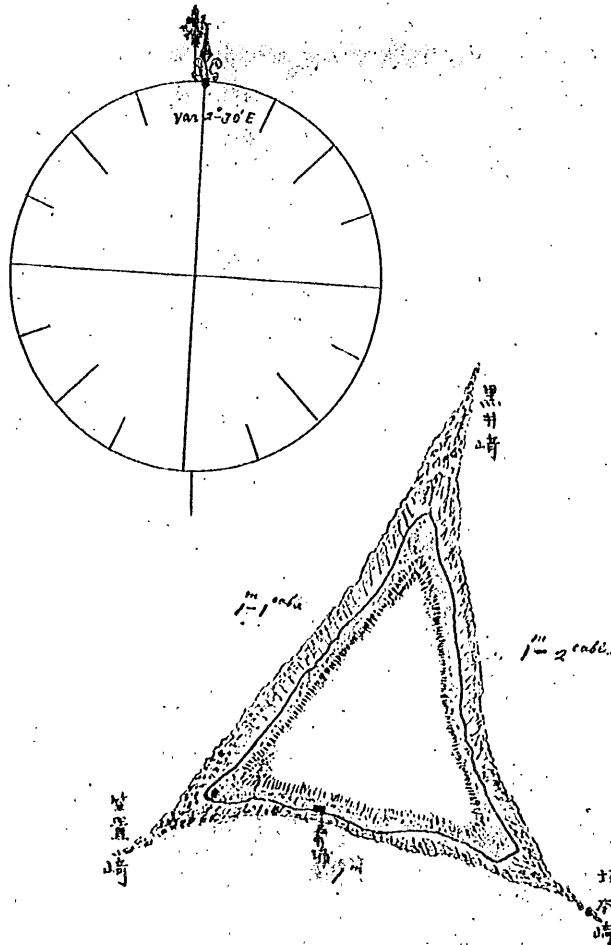
一本艦ニ滞在僅ニ二日ヲ精査スルノ余日ナカリシモ

該島ニ駐在セル本艦乗組秋元中尉が滞在中

尚多少ノ調査ノ材料ヲ得タルベシ

1278

附圖(A)



1279

附圖(c)

1279

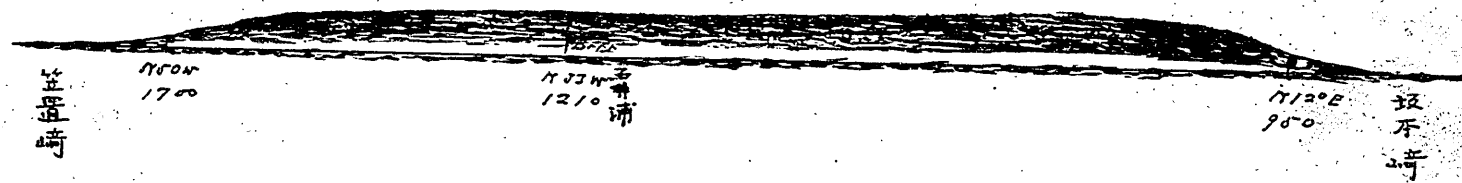
星井山

1279

星井山

1279

附圖(B)



1280



1281

以下

南島島同欵
鳥島噴火一件
漫合

高4越前

三ノ宮の御門に参りて
御座る御方へ

此ノ御書は

機密第二十七號一五

来ハ月来若ハ九月始ニ於テ軍務高々總ヲ南
島島ハ臨遣ヨリテハ千脚内議ハ付ニ就キ
軍一紙中九十九號出馬唐ハ坂右ニ寄テ支
シテ少ク及ハ市回ガ様也

追テ同船ニ並出集ハ於テ入集ノ者ニ付
爲会ノ様狀也

明治三十五年八月十日

向山横須賀様ヨリ討參謀長

軍秘第九

齋藤也平首軍務局第一課長殿

1284

第一編

軍務局

八月廿一日

軍令部長

次長

第一局

副官

佐藤 高志

副官

參事官

發付
八月五日

昭和四年八月六日起案

大臣 庵

總務長官

人事局長

人事局長

軍務局長

第一課長
第二課長

課員

第一課長
第二課長

主任課員

經理局長

經理局長

第一課長
第二課長
第三課長

艦政部長

有馬

第二部長

訓令案

軍艦高千穂ヲシテ八月下旬便宜南島ニ至ラシ

海軍機密第二六六號

海軍省

別紙七月二十二日附寄置船長へ訓令ノ任務ヲ
 結實シ兵ヤリ島般笠置ヨリ同島ニ上陸駐屯中ノ
 同般乗負ヲ便乗セシメ歸航セシムル採取ナフヘシ
 三十五年八月十二日
 横濱司令官長官
 大臣

ノ別載七月二十二日附寄置船長へ訓令ノ任務ヲ
 継續シ英ヤリ島般望置ヨリ同島ニ上陸駐屯中ノ
 同般乗員ヲ更乗セシメ歸航セシムル採取セフヘシ

三十五年八月十一日

大臣

横濱支店長

高千穂航路力ノ都合依リアズコトノ乗込ノ計有テモ
 然リ要スル場合ニ於テ最モ早キ乗込ヲ同島ニ送附セシムル
 東京駐在年五公使ノ事務受任該島長官有テ託

別紙七月二十二日附笠置艦長訓令ノ事務ヲ
 継續シ兵ヤテ島般笠置ヨリ同島之上陸駐屯中ノ
 同艦乗員ヲ便乗セシメ歸航セシムル採取セフヘシ

三十五年八月十二日

大臣

横濱司令長官

進テ便乗ノ笠置乗員ハ帰港ノ上一時横須賀海兵團
 在リシノ笠置入港ヲ待テ同艦ニ復歸セシムル様取計
 行ハシ

ローギン島方面ノ事ニ交渉セシムル事ニ決シ

海防機要第三十三号

米王高松の長丁中を政府より南島島ヲ
台領スルコトノ計のヲ得んる外後大ノ通候様之候
島ノ東ニ寄ル此官輕屬現ニ水ノ事等ニ于候
人仕仕セリ是等船ハ航海權屬惣ニヤカ同島等ノ
多王領土及庄仕氏保護ノ實事ニ於テハ
明治三年申年七月二十日
海防

芝罘艦長

此中ノ為國際問題ヲ惹起スルハ注意スルハ
勿論アリ然レ一行ニ對シテハ手続ハ後ノ事ニ
注意スル

三六六 二 四 六

多良波南島島、派遣、軍艦、並、置、任、傍、り、待、
續、せ、い、る、月、下、旬、軍、艦、高、千、穂、ろ、更、り、島、に、
近、中、に、取、り、伏、撃、し、あ、り、及、通、信、機、を、
三、五、年、に、再、次、に、
あ、る、大、に、
龍、形、に、五、の、海、軍、の、機、關、に、
あ、る、

(坂根製)

軍部次長

次長

第一局

副官

佐佐木高志

佐佐木高志

副官

參事官

發付
八月六日

二十五年八月十四日起案

大臣

總務長官

軍務局長

人事局長

經理局長

艦政局長

第一課長

第二課長

第三課長

第四課長

第五課長

第六課長

第七課長

主任課員

軍艦高千穂

南島島へ派遣予定

海軍

今

三片高千穂ノ航積

力ノ都合ニ依リ、早ク、
船ヲ要スル場合ニ、更ニ、
其年々、中、右、千、
回、島、
ニ、残、留、セ、シ、ル、
料、ニ、向、取、
中、相、成、度、
ハ、有、ル、
ナ、
ヤ

三片高千穂ノ航積

費

拾七ノ八

1294

1293

1292

三十五年
自來
費

今、國に此の事、人々、
今、國に此の事、人々、

一、
一、

一、
一、

一、
一、

力、
力、

一、
一、

や

三十五年

あ

あ

卷二十六 六 號 五

此通境之喉鎖字處可念中連一氣而平
 者以爲及通指也

辛卯年

愛

朱子語類

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

卷六 六號 中

[illegible]

辛丑年九月十六日

提心吊胆

海

軍



秋元海軍中尉ニ共スル訓令

秋元海軍中尉ニ共スル訓令

本艦ハ石炭搭載ノ為ノ一時横須賀軍港ニ帰航スルニ
付其官ヲマーカス島ニ駐在セシメ候條別紙海軍大臣ヨ
リ本官ニ共スラレル訓令ノ要領系ニ尤記シ訓示ヲ遵
守シ慎重事ニ從フ可シ

明治三十五年七月二十七日 於マーカス島

笠置艦長坂本一

海軍中尉秋元存太郎殿

一 米國商船船長「ロズビル」来着セハ東京駐劄ノ米國
全權公使ノ書簡並ニ外務書記官石井菊次郎ノ

秋元

訓令

賀軍港ニ帰航スルニ

候條別紙海軍大臣ヨ

系ニ龙記、訓示ヲ遵

カマールカス島

長坂本一

東京駐劄ノ米國

記官石井菊次郎ノ

大正十一年九月廿五日
海軍大臣 田中義一
訓令

1297

書簡ヲ同人ニ致スベシ

一若シ米國高船航路ニ前項ノ書面ヲ致シタル後同人ニシテ
猶出港スルノ模様ナキトキハ直ニ出港スヘキ旨ヲ同人ニ請求
スベシ但シ船舶ノ修理等ノ為ノ一時滞在ヲ請求スルノキ
ハ勉メテ便宜ヲ興フベシ

一「マカス」島ニ上陸等ヲ請求スルモ許可スヘカラス若シ航
路ノ健康保持ノ為ノ航路ノ上陸ヲ請求シタル場合ニハ一
回ニ五名以下ヲ限リ且ツ取締ヲ附セシメ之ヲ許可スベシ
一下士以下十六名ヲ具シ官ノ指揮下ニ付シ同島ニ駐在セシム

南島島ニ駐在セシノル人右

海軍中尉

秋元秀太郎

一等兵曹

吉村重助

二等看護手

伊東丑松

一等水兵

木村榮吉

全

松久保佐市

全

池田信夫

全

宮原藤助

全

渡辺八藏

一等信号兵

甲斐荒次

二等水兵	藤原百太郎
全	柴田伊之吉
全	宇野貢
全	平生宇一
全	濱田豊藏
全	吉川久太郎
三等水兵	後藤島男
三等木工	瀬戸山才藏

(振替帳)

軍務局長

部員



海軍

案

今回南島島へ派遣ノ軍艦高千穂ハ申進ム迄モ無
 之ヲ起石炭ヲ騰載セシメテ様可然御取計加拂
 尚ハ九月上旬頃派遣ノ豫定ナリ今更ニ外務
 省ノ別紙ノ通、来電有之ヲ付基カハ派遣期日
 シ早メラレム儀、其條ヲ市参考ル所申進
 三十五年八月廿六日 軍一課長

横鎮参謀長

此ノ別紙ハ島ノ植民地モ、モ市参考ル所申進
 (印)

必第①ノ

別紙ハ市参考ル所申進

(印)

供覽

不

總務
長官
濟

電

譯

明治三十五年八月十日午後五時四十五分
土日午前五時二十分着

東京小村

高平

八月二日ホノルル電ナリトテ同月九月ノ当地新聞ニ左記ノ如ク
記載セリホノル人ニシテマーカス島遠征隊ニ關係スル言ハ依ル
該遠征隊ノ乗組ナル船ハ当地出發ノ際モ一隊ヲ挽
載シ且船長ハ會社ヨリ該島ニ米國を旗ヲ樹テ撤去スル
止ヲ得サニ至ルテ也ヲ疑スヘキコトヲ訓令セリタリ尚船長
ハ該島在留ノ日本人ニ告グニ遠征ノ目的ハ梅島積糞ノ
價值ヲ研究スヘキヲ金々平和的ニコトヲ以テシ穩カニ上
陸スヘキコトヲ訓令セリタリ然レモ日本入ニシテ船上陸ヲ
拒メ時ハ船長ハ一応該島ヨリ視力ノ及ビザルコトヲテ航走シ

1302

更ニ暗夜ニ乘リ歸來シテ武装シ兵員ヲ上陸セシメ而
 シテ米國ニ旗ヲ樹テ優勢ナ軍隊ノ為ニ破棄セラルニ
 至ルコト也ヲ守獲スヘシ若シ日本軍艦ニ遭遇セルトキハ船長
 ハ該島ノ發見者ニシテマールカス島海島積黨會社代
 理人タル證明書ヲ提出シ尚其遠征目的ハ會社ノ為
 ニ該島ノ學術上ノ調査ヲ為スニアルコトヲ以テシ而シテ
 尚モ軍艦ニテ上陸ヲ拒ムトキハ船長ハ米國ニ旗ヲ樹テ
 タル短艇ニ武装シタル兵員ヲ乗組ミシテ強テ上陸シ力
 竭クニ至ルコト遠征ノ目的ヲ遂行スル遠征隊ハ船員
 九名剥製師一名及米國農業者官吏一名ヨリ成
 ル

copy

長
友
信

Washington, 10 - 8 - '02. 5 - 45 ^{p.m.}

Rec'd, 11 - " - " 5 - 20 ^{a.m.}

Komura,

Tokyo.

57. A telegram dated Honolulu 10 = 10 is published in newspapers here 10 10 10. Substantially as follows:-

" According to Honolulu men interested in the Marcus Island Expedition, the vessel which left here for the island, carried a complement of Mousel rifles and her captain had instructions from the company to plant American flag on the island and keep it floating until compelled to put it down. His instructions also required captain to inform Japanese on the island that his expedition was peaceful one for the purpose of making scientific attainments of the value of guano deposits and attempt to make peaceful landing. In the event that Japanese still refused to allow him to land, captain was to sail away out of the sight of the island and return under cover of darkness land armed force and raise American flag and keep it up until torn down by superior force. In the event of his encountering Japanese war vessel, captain was to present his credentials as discoverer of the island and agent of

the Marcus Island Guano Company and to state that the object of his expedition was to make scientific Examination of the island for the company. If the officers of the war vessel still refused to allow landing, captain was instructed to tramp ashore with armed force in a boat flying American flag and attempt landing and carry out the purposes of the expedition unless physically restrained. Expedition consists of crew ^{of} nine, a taxidermist and an official of United States Agricultural Station."

Takahira.

號

醫

海軍

高千穂、備前、先王史記、宣山抄後之
福子もいふ所、船指し可成に在り、高千穂城
より
高千穂城、
高千穂城、

三十五(月)

Longest

美古

軍

號

卷

東國通志卷之六

in-ent ~~cell~~ = hand for 1003

北氏印行

軍一

シシイ

一
號

中

今國ノ地ノ邊ニ、
我々ノ地ノ邊ニ、
自今ノ地ノ邊ニ、
中ノ地ノ邊ニ、

シシイ
シシイ

シシイ
シシイ

外傳有之、甚難得、 石井孝次郎氏蔵、 是書秘本、 一切	34 51 52 54	ナリ
--------------------------------------	----------------------	----

供覽

軍務局

軍令部

1310

第一局

第一局

第二局

第三局

核漢郵便電信局より電報
力に血を電報局より電報
力に血を電報局より電報

明治三十五年八月十一日

近江守子爵貴川親王

海軍大臣男爵山本權兵衛殿

遞信省

九月十一日
明治三十五年八月十一日

遞 信 省

八月十八日午後四時五分

横濱より

本月定期の船は行
後日る船鳥島る
日島大し人ふ埋没
不受に缺かん
物ノ川流シアキ

(備考)

鳥島、新設のナレ集配
本島ノ鳥島る
配更ニ

八月十日午後八時三十分 横濱より

鳥島噴火ノ件兵庫九船長より右ノ報告ニモ
之面よりナリト云々

一、本月七日往航鳥島寄港ノ際長火ニ復
航十六日正午寄港

二、噴火口ノ最大ナリト中央ニシテ元住アリシ事
トナリ外ニ二三ヶ所アリ

三、金島ノ人畜ノ生ねスルモノナリ北西部ハ
区域ヲ離シ外燒失セシ所ナリ

四、本月十日ハ船受取九金島通過ノ際快
状ヲ見タリト云々兵庫九ハ父島ニテ聞込

五、人口ハ丈島より出航ノ者トモ約百二十名
餘アリト云



1314

八月十八日午後八時二十分

横濱局發

鳥島噴火ノ件兵庫丸船長ヨリ各所へ報告シタル書面ヲ得タリ大要左ノ通り

一、本月七日往航鳥島寄港ノ際異状ナシ復航十六日正午寄港

二、噴火口最大ナルハ中央ニシテ元住家アリ直ク上ナリ外ニ二三ヶ所アリ

三、全島ニ人畜ノ生存スルモノナク北西部ハ區域ヲ除ク外焼失セシ砂石アリ

四、本月十日帆船愛坂丸全島經過ノ際慘状ヲ見タルヲ十三日兵庫丸ハ父島ニテ聞込ム

1315

五、人口ハ丈島ヨリ出稼ノ者トモ約百二十名餘ニ由

治
目

(北氏印行)

軍令部長 

第一局





副官



副官



參事官

發付
八月九日

三十五年八月十九日起案

大臣 

總務長官



軍務局長



第一課長



部員



軍艦高千穂ヲ南真島へ派遣方ニ関シテ
訓令要

副令、乃この通に、此等、同知、し、出来、得、候、至、急、
 出、航、准、備、可、敷、候、備、前、書、あり、島、島、即、今、三、子、島、事、寄、附、し、
 同、島、に、於、て、噴、火、現、況、ヲ、視、察、せ、ら、ん、採、取、可、敷、
 三、十、五、年、一、月、十、九、日、
 大、臣、
 松、平、大、蔵、門、下、

長官 瑞 市 神

軍務部

1318

軍令部



電報局 瑞市 市分 (十九日朝)

(書中取ラス)

横濱市鎮府司令官、電報

総務長官ヨリ

郵船會社 兵庫丸船長、報告ヨリ

同船、本月十六日小笠原群島、鳥島(一名

王子島)及夏内近海底に噴火アリ

大

認め近き所に見タルに全島噴火、

見非常な惨状に陥リタル實見也

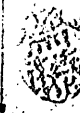
由 就本月下旬南島島に向て出
 航する旨を軍艦高千穂へ其の往々路に
 於て前記、噴火せし三子島、三子
 へ必要ありと伝へ同航へ出来得る限り急
 速に航海準備を整へる様取計し
 せし

高千穂、出航日決定を横鎮より申付答

軍第三十九號ハニ

1320

買發局第一號



海

八月

發行

御手紙先取一拾之圓之千枚馬島
取之集之千枚馬島
同取之千枚馬島
三枚馬島
拾之圓之千枚馬島

(徳川印行)

参考

1321

本船若二十次後航路ニ至ルハ
 月十号少立原又島ニ見渡シ七帆
 し鳥島に向テ航海晴天也東ノ和
 風ニシテ波浪アリ
 翌十二日午おし時三十分ノ霧始ル
 ノ東方約五哩ノ徑ニ至リ尚針路ヲ島ノ島
 ニ據リ進航セシニ十おハ時次鳥島ノ南
 西ニ當リ海底火山ノ高ク噴出スルヲ望ミ
 浪多ク約二十五ノ哩ノ距離ニ到リ此處ニ
 浮島ノ中央ヲ見相付ク噴出スルヲ見
 午お十時三十分迄ニ至リ浮島ニ至リ

近きありり方月日廻り始、東方世々終
 西方に到る甘き棧閣、後より應可し又
 海底、浅深の淵を而して池岸と云ふも
 冬哩乃と云ふは、距離に於て絶えず流
 りつゝ便に鳴呼する人景及家
 空に見えたる海底火山、懐かしく山頂
 烟に見えり。殊に浪高の千歳浦ノ如く
 は岸土砂崩壊の形を變じ甘き懐
 かしの波が、船に揺られ揺られ
 船正午十二時自島より帆し翌十時
 午後五時廿八分ハ大島より有る
 同日下午六時三十分ハ大島より帆し翌十
 八日午前九時十五分横濱より有る

一 焼火口、最大ナモノハ、該島ノ中央ニシテ
 徑ヤアリシ、ナリトナリ
 二 其地山頂ニ、三箇所アルヲ認ム
 倉島ノ人、甘高ノ生ナスモノ、ナリト云フ、其西
 ノナニ城ヲ築ク、ガ人自、品焼出セシ
 砂石アリ、見、ニ
 三 鳥島ノ位置、北緯三十四度廿八分廿七秒、東經百四十四度廿四分廿七秒
 四 海底火山位置、北緯三十四度廿七分、東經百四十四度廿七分
 鳥島ノ南西、一点、本約一哩、ナリト云フ
 五 海底火山焼出、最、高、水、上、リ、上、リ、四
 五、十、吹、甘、而、焼、キ、手、吹、距離、三、十、哩、目
 リ、認、ム

1324-2

十、漢書

